
ドラクエティータイム

たけにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラクエティータイム

【Zコード】

Z7345W

【作者名】

たけにゃん

【あらすじ】

ドラクエ3とけいおんのコラボレーション。

勇者となつた梓は仲間達を巻き込んで、大冒険へと旅立つていく魔王を倒し、元の世界に戻るために…。

「キャラクタ紹介」（前書き）

今回の「」の小説はWii版ドラクエ1・2・3発売記念的なもので、
けいおんとのコラボで書いてみました。

作中でも説明しているルールによりゲームの進行と共に小説も更新
していきます。

故に、この先どんな状況になるか作者の私自身もわかりませんが、
どうかよろしくです

＜キャラ紹介＞

中野梓

桜が丘女子高等学校三年生でけいおん部所属の物語で主人公に抜擢された当初は真面目な部分が強かつたが、先輩達と共に過ごし楽しむことができるようになった

この物語ではいきなりドラクエ3の世界にやって来て、戸惑いながらも仲間達と共にこの世界の平和と元の世界へ戻る事を目標に進んでいく

この世界での役職は【勇者】

平沢唯

桜が丘女子高等学校卒業生。
同級生の澪・律・紬に梓を加えて、放課後ティータイムとして活動を行っていた。

練習よりもお茶の時間が好きではあるが、実際にはギターの知識ゼロからかなりの上達をしておりそれなりに練習を重ねていた。
梓によりドラクエ3の世界に召喚される

この世界での役職は【遊び人】

秋山澪

桜が丘女子高等学校卒業生。

律に強引な形でけいおん部に入る事になるが、結果自身の欠点であつた恥ずかしがり屋な部分等を克服できている
梓と共に真面目にやらない唯や律を正す役目を持つていて
ちなみに左利き

この世界での役職は【魔法使い】

第1話・勇者誕生

いつもと変わらない日常…。

先輩達も卒業し、憂や純がけいおん部に入ってくれて新たな目標に向かつて進んでいこうとした矢先…。

誰も予想していない出来事が…起きてしまったのだ。

梓「…んつ…」

いつものように起床する私・中野梓。

王様「勇者梓よ、居眠りをしている場合ではないぞ」

梓「はい?」

聞きなれない声に眠っていた私の頭は、一気に冴えていった。

王様から色々な話をされるが、梓にとっては今のこの状況を理解することの方が先だった。

旅立つ資金と道具を貰い、足早にこの場を離れ外へ出る梓。

梓「…城…それにこの街…どう言ひ方…?」

とはいえる自分の記憶の中には身に覚えがないもののこの街の事も入つていて、それが余計に梓を混乱させていた。

梓「…とつあえず話を聞いてみればいいのかな…」

梓は街の人達と話しながら、どうしてこうなったのか過去を思い出してくださいにした。

昨日までは至って普通だった。

学校でも帰宅してからも・・・。

梓「そう言えば純がゲームの話をしていたような・・・」

しかし、特に原因が思い出せず考へても無駄なので教へてもらつたルイーダの酒場へと向かう梓。

梓「ここで仲間を…そりですよね…私一人だけじゃ寂しいですし…ここは…」

何やら黒いものが梓に一瞬見えた気がした周りの客だが、そこは気のせいとしてスルーしていた。

ルイーダ「いらっしゃい。貴方が勇者・梓ね。ここシステムは好きに使っていいわよ」

そう説明する店主のルイーダ。

梓「じゃあ…」

そして、梓は慣れたような手つき…ではないが作業を進めていった。

1時間後…ルイーダの酒場の別室…。

律「さて、梓。この状況を最初から全て説明してもらいましょうか」

梓「律先輩…落ち着いて…」

唯「この格好面白いね~」

そんな中で、いつも調子で楽しんでいる人物は平沢唯。

和「そうね、私としても説明してほしいわ」

純「そうだ…ここってゲームの世界だよ…確かドラゴンクエスト3

純の言葉を聞いて梓は

梓「そうだった。純がこのゲームの話をしていく…じゃあ、純が原因なんじゃない」

憂「とりあえず落ち着いて状況を確認しよう」

憂の言葉に全員冷静になり、梓から話を聞くことにした。

澪「何だか、大変な事になつたな」

そう呟いたのは秋山澪だった。

純「でも、これが本当にゲームの世界だとしたら…」

憂「純ひめさん、顔がにせかけてるみ……」

唯「ヒーリング、あすこさん」

と、急に梓に話しかけてきた唯。

梓「なんですか？ 唯先輩」

唯「私達の格好それぞれ違うナビ……」

その事を尋ねる唯。

さわ子「その説明なら私がしてあげるわよ。」

全員「！？」

いきなり現れたけいおん部の顧問・山中さわ子に驚くメンバー達。

律「こんな時にまで神出鬼没かよ！」

唯「でも、どうしたの？ さわちゃん」

さわ子「どうやら私は貴方達のナビゲーター役みたいね……このゲームにはこうこう役はないんだけど、みんなもパニックになっているだらうからって事かしい」

そう考えるさわ子。

紺「それで……」

さわ子「さつきの唯ちゃんの質問は梓ちゃんが決めた職業に基づいた服装なの。イメージ的なものが多いんだけどね」

澪「私のは……」

梓「澪先輩は魔法使いですね」

さわ子「説明が長くなるからそれぞれの職業紹介は後ににして……この小説の作者さんがこのゲームはクリアしてないけど前にやった事あるから、いつもとは違うフレイジングにしようとして考えた案を……」

律「嫌な予感しかしねえぞ」

紬「でも、みんなで一緒に何かやるのって楽しぃう」

少しウキウキ気分の紬。

さわ子「説明を続けるわよ。まず、パーティーは最大で四人。でも、梓ちゃんは勇者で外せないから加えられるのは三人ね」

唯「なら、私があずにゃんに同行しちゃうよー」

張り切つてそいつ言い放つ唯。

梓「余計な危険が増えそうですね」

唯「あずにゃんひどい！？」

澪「それは置いといて……どうやってその三人を……」

さわ子「えっと…作者の説明によるとランダムで三人を選び次の目的地まで進む事…ダンジョン攻略の場合は攻略後、街に戻るまで…らしいわよ」

純「じゃあ、梓以外のメンバーが「いやまあぜで毎回三人選ばれて旅をするってわけですね」

そう告げる純。

憂（お姉ちゃんと一緒になればいいかな…）

ふとそんな事を考えている憂。

さわ子「まあ、全員知ってる人達同士なんだしひクシャクする事はないでしょ。また何かあれば出てくると思うからよろしくね」

そう言い残し、さわ子はルイーダの酒場から消えていったのだった。

第2話・玉堀せいかがホームー? (前書き)

最初のランダム選出... どんな内容かは本編を読んでみてください

第2話・出発はドンボーチーム!?

そんな訳で、最初の目的地レーベへと向かうメンバーをランダム選出した。

梓「…」

なぜか無言になる梓。

紺「いきなり最初から選ばれるなんて、よろしくね梓ちゃん

唯「よ～し、張り切っちゃうぞ～」

純「ガンバロ、梓」

梓「ムギ先輩はともかく…」

澪「まあ、そういう結果になつたのは仕方ない…」

律「澪の場合はモンスターと戦いたくないだけだろ」

和「いろいろ大変だと思つけど、唯の事よろしくね

そんな訳で、他の仲間達をルイーダの酒場に残し梓達は準備を整えるとアリアハンを出発していった。

【目的地・レーベ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 LV1

紺：戦士 L V1

唯：遊び人 L V1

純：盗賊 L V1

紺「私、ゲームとかやらないけどひつたらいいのかしら」

純「RPG・・・つまり、ロールプレイングゲームはキャラのレベルをあげながら進んでいくんですよ」

梓「まずはアリアハンの周辺で強くなつていきましたよ」

そんなわけでいつもの調子でやってみたものの・・・大変なことになつていた。

梓「装備配分間違えた！？」

戦士である紺の防御力が一番低いと言つ事態を招いていた。

更に、攻撃力の低い唯と純。

梓自身もレベルアップが遅く、何度も田舎に通つては休む日々が続いた。

純「梓、そろそろ橋越えて先行こう。装備もレベルもいい頃だし」

純の提案もあり、居残っているメンバーの事もあり梓たちは橋を渡り北にあるレーベを目指した。

だが、しかし遊び人・唯が普通に目的地を目指す事は…なかつた。

唯「草むらの先に何があるよ~」

そう言いながら足を踏み入れるといなくなってしまった唯。

梓「唯先輩!~?」

紬「二人とも追いかけましょ~」

梓と純の手を取つてその先へ向かう紬。

梓とひらけた場所に到達した四人。

唯「いったちに地下の入口があるよ~」

純「…また勝手に進み始めましたよ~」

呆れながら三人は唯の後を追つて進んでいく。

道中敵と戦つていると、洞窟からキレイな場所へとやつて来ていた。

梓「太陽の光…洞窟を抜けたんですね」

紬「あれを見て…私達が出発したアリアハンよね」

紬が示す方を見ると、確かにアリアハンの城と城下町が見えていた。

梓「外に出て良く見たらここはあの小島にあつた塔ですね」

唯「よしつ、今度はこの塔を探検するんだね!~」

駆け出して行こうとした唯であったが、すぐさま梓が引きとめた。

梓「さつきの洞窟内でも今まで出なかつたモンスターがいました。手傷も負っていますし、回復手段も薬草しかないんですからここは戻りましょう。それに私達が受けた目的はレーベへの到着なんですから」

そう唯に言い聞かせる梓。

紺「そうね、装備も充実して入るけど完璧じゃないし」

純「さすがの唯先輩でも今の状態の梓にワガママは通りませんね」

そんな訳で、一度アリアハンへ戻り休息を取つた四人は一直線にレーベに入つていったのだった。

紺「アリアハンと比べると自然が多い所ね」

唯「あずにゃん、こならゆつくり探索してもいい?」

梓「構いませんけど私達はチームなんですから団体行動でいきますよ」

色々言いながら歩いていく三人を後ろから眺めている紺。

紺(一体誰がこんな事をしてきたのか…でも、梓ちゃんを勇者としてリーダーにさせたのは正解かもしれないわね…アリアハンにいるみんなと協力して…必ず元の世界に戻るから)

梓「ムギ先輩、どうしたんですか?」

唯「早く行こう～」

紺「はーい…ふふつ」

笑顔を見せながら梓達の側に駆け寄る紺。

そして、梓達はゆっくりとレーベの中を探索していくのであった。

目的達成

梓	Lv3	装備品・銅の剣・旅人の服・皮の盾
紺	Lv4	装備品・棍棒・旅人の服・皮の盾
唯	Lv5	装備品・銅の剣・布の服
純	Lv5	装備品・ひのきの棒・旅人の服

報告

本を読んで純の性格が【ふつう】から【ちからじまん】に変わりました。

第2話・出発地点はどこ？（後書き）

普通のプレイでは僧侶や魔法使いが最初にいるはず（自分がかつてFCやGBCでやった時もそうでしたが）なのですが、やはり回復役がないときついのはどのRPGでも同じですね
次もまたランダム選出をやっていきますので…
ではでは…

第3話・ナミの塔の攻略

梓「疲れました…」

アリアハンへと戻つて来て自宅にてぐつたりしていた梓。

紺「とりあえず酒場の方へ向かいましょ。澪ちゃん達も待つてるわ」

そんな訳で酒場へと入ると、田の前にさわ子がいて四人とも団まつっていた。

澪「おかえりつて…まあ、びっくりするよな…」

さわ子「調べ回る時間削減のために私が来てあげてるんぢゃない…
次の目的地の発表よ」

梓「普通に現れてください、って言つかお酒とか飲んでないですよ
ね」

さわ子「失礼しちゃうわね…まあ、それはいことして…次の目的地
は塔よ…もう大体分かると思つけど」

憂「西の方角にあるあの塔ですよね」

唯「それなら私達一足先に入つたよ

律「なんだつー!?

大げさに驚いてみせる律。

梓「でも、話だと塔へ行く道はあんな所にはなかつたはずなのに」「元気なわ子」「まあ、ビニからでもいいからちやちやっと入つて目的達成しなさい。今回はダンジョンの攻略だから到着するだけでなくそこでの役目を果たして戻つてくるまでが目標だから」

梓「じゃあ、またメンバー選びですね…」

また不安になりながら運を天に任せる梓。

そして…。

【目的地・ナビゲーションの塔攻略】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者	Lv3
律：武闘家	Lv1
和：僧侶	Lv1
純：盗賊	Lv5

憂「また純ちゃんが…」

律「よし、よつやく私の出番か」

澪「…」

和「私は僧侶の役目だから、しっかりみんなをサポートしないといけないわね」

梓「初めてのメンバーもいますから、またレベル上げと装備充実さ

せてから…」

そう決める梓。

それからじしまじへして…。

律「結構強くなつたよな」

和「そうね…いつの間にかにね」

初参加の一人はとりあえず満足そつとしていた。

純「梓！」

梓「うん、それじゃナジミの塔へ…」

律「そうだ、入口二つあるんだろ？唯なら両方探索するはずだ」

和「二人は北の入口から入つたのよね

純「確かに何か落ちてるかもしれないし…どうする？梓」

梓「私達も強くなりましたし、何かあればレーべやアリアハンに戻つて回復もできます。ここは積極的に行きましょう」

そう判断し、一行は西側にある入口を田指す事にした。

律「やはり、お宝があつたか…」

和「敵もフィールドのより強いのが出てきてるから長居は無用ね」

そして、敵を倒しながら進軍していく一行。

すると、以前梓達がやつてきた塔の一階部分へ到達した。

純「こんな風に繋がっていたんですね」

律「梓、この間はあつちの通路見たのか?」

塔に入つてすぐ右側の通路を示す律。

梓「いえ、この間はこの塔攻略が目的ではなかつたのですぐに出ましたけど……」

律「よし、行くぞ!」

と、純の手を引っ張り駆け出して行つた律。

和「ちよつ…律!?

律「私達の素早さなら敵と出会つても大丈夫だよ」

梓「行つちゃいましたね…私達は下手に動かずに一人を待ちましょう」

それからしばらくして律と純が戻ってきた。

純「あれが盗賊の鍵で開く扉のようです…ここで鍵を手に入れれば進めそうですね」

和「じゃあ、再出発しましょっ」

そんな訳で塔攻略を再開したのはよかつたが、初のダンジョン攻略は中々難しかつた。

純「ちよつ…と…休もつよ…」

梓「純、体力無さすぎ」

律「まあ、敵と戦いながらフロアを行ったり来たり…階段登つて行き止まりで戻つたりとか…私だつてきついよ」

和「でも、フロアのほとんどを把握しながら登つて來てるからそろそろ頂上に着くはずよ。頑張りましょっ」

元・生徒会長の言葉は純の精神力を回復させていった。

純「でも、どうせだつたら…」

梓「ここに澪先輩はいないからすぐに出発しましょう」

純「つべつ…」

律「はいはい、行くぞ~」

互いにフォローし合いながら、梓達はよつやく塔の頂上有る部屋にたどり着いた。

そして、そこにいた人物から見事【盗賊の鍵】の入手に成功した。

純「やつた！」

和「気は抜かないで。私達の目的は鍵を手に入れて戻る事なんだから」

律「一応壁がない所から飛び降りれるらしいけど…」

純「……いやいや…普通に危険ですよ、これ」

梓「でもそれは設定上問題ないはずですから…怖いんですけど…行きましょウ」

意を決して飛び降りた梓。

そして、梓に続く三人。

和「何とかなるものね…登るのに時間かかったのに帰りは一瞬で塔の外…」

純「生きた心地がしなかつたけど…とりあえずあの扉の先を調べましょう」

そんな訳で、早速鍵を使い扉を開けその先へ進んだ。

梓「あれ？」

そして、階段を抜けた先の光景を見て驚いた梓達。

純「ここ、牢屋？」

梓「牢屋にいる人見た事ある…って言つたこ…アリアハンのお城の牢屋！？」

一行はすぐさまそこから外へと飛び出した。

和「外の洞窟が塔に、そして塔がお城に繋がっていたのね
律「城に何かあれば逃げ出せるようになつてやつか？」

純「早く澪先輩に…いえ、みなさんの元に帰りたいんですけど…」

和「そうね、アリアハンで鍵を使える所の探索まで私達の役目」

そして、一行は鍵を使い更なる人物達から話を聞いた後ルイーダの酒場へと戻ってきたのだった。

憂「みんな、お帰り～」

梓「何かいい匂いが…」

澪「せつかくだからルイーダさんに頼んで、台所を貸してもらつて夜御飯を…」

唯「早く早く、お腹ペコペコだよ

梓「唯先輩は今回働いてないです、それにじょ飯を作る手伝いもしないはずですから」飯をお預けです

唯「あずこやん、ひどいー？」

律「とにかく飯食べてゆっくり休もうぜ。また明日には次のクエストがあるんだしな」

純「梓は勇者だからずっと外に出てなきゃいけないんだし」

そして、その日の酒場は楽しげな声が夜遅くまで続いていたのであつた。

目的達成

梓	Lv6	装備品・銅の剣・皮の鎧・皮の盾
純	Lv8	装備品・ブロンズナイフ・旅人の服
律	Lv6	装備品・稽古着
和	Lv7	装備品・銅の剣・皮の鎧・皮の帽子

報告

本を読んで律の性格が【なまけもの】から【おてんば】に変わりました。

第4話・いざ、新大陸へ

さわ子「初ダンジョンクリアおめでとう」

翌朝、いきなり登場するさわ子だがすでに慣れたのか誰もリアクションを取る事はなかつた。

梓「それでは次の指示をお願いします」

さわ子「みんなひどい！？」

【目的地・ロマリア】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 L V 6

純：盗賊 L V 8

唯：遊び人 L V 5

澪：魔法使い L V 1

唯「また登場だよ」

澪（やつと一緒になれた……）

憂「お姉ちゃん……私嫌われてるのかな……」

梓「う、憂……つて純、人をストーカーしていないで憂に替わればいいのに」

純「何か酷く言われてるけど、ランダムで選ばれたんだから文句言いようがないじゃん」

少し頬を膨らませながらそつまつ純。

さわ子「はいはい、一人が言い争っている間に澪ちゃん達に今回の目的伝えておいたわよ。澪ちゃんはまだレベル1なんだから気を抜いてたら・・・」

純「澪先輩は私が守りますから!」

唯「じゃあ、あずにゃんは私を守つ・・・」

紺「今回のチームも大変そうね

梓「レベルも順調なんですから、自分の身は自分で守つてください」

微笑みながらそつまつ紺。

梓「それじゃ、澪先輩のレベルをあげながらレーベに向かいましょう」

唯「新大陸に行くんじゃないの?」

律「さわちゃんの話の最後の部分しか聞いてなかつたな・・・」

梓「準備があるんですね。ほら、行きましょう」

唯「あ~待つて~・・・もう少しのお菓子・・・」

梓に引きずりながら姿が見えなくなった唯。

純「澪先輩、私達も

澪「うん、頑張る」

小さく意気込む澪。

そして、一行はレーべへ向かいながら澪のレベル上げを頑張つていた。

唯「澪ちゃんの呪文強いね」

純「魔法使いなんだから呪文が強いのは当たり前なんだけど……」

梓「小さなメダル五枚で交換したその鞭の攻撃力が高いんですよね：魔法使いなのに普通に打撃戦出来るし」

澪「そのおかげで順調にレベルも上がってるよ

かなり喜んでいる様子の澪。

梓「それに比べて戦闘中に寝ないで下さい、唯先輩」

純「梓…怒る気持ちはわかるけど…唯先輩を遊び人にしたのは梓だからね…」

唯「そりだよあずこちゃん。」の責任はきつちつ取らないと

梓「むむっ…とにかくレベルを上げながらレーべやる事やるです」

と、一人レーべに入つていつてしまつた梓。

澪「仕方ないレベル上げを切り上げて私達も…」

そして、梓達は盗賊の鍵を使い魔法のたまを入手する所まで到達した。

唯「やわちゃんの話だと新大陸に行くのに必要なんだよね」

澪「次に向かうダンジョンで使うんだ。敵も強いらしいから装備を整えよう。レベル上げしている間にゴールドも溜まつたし」

どんなものでも入る道具袋も不思議だが、たくさんのがゴールドを持ち出来るのも不思議である。

純「大体の装備はオッケーだね…私と梓の武器も鎖鎌になつたし」

唯「どんな敵でもへっちゃらだね」

梓「唯先輩、油断しないでください。敵の数はこっちより多い時もあるんです…澪先輩の武器や呪文があるとはいえ…」

唯「じんじん言つていいく梓。

澪「梓、唯、だつてもうわかつてゐる。最初は戸惑つていたけど…やらなきゃ元の世界に帰れないんだ…待つてゐるみんなとも力を合わせて乗り切る…」

純「はい、澪先輩」

梓「そうですね…でも、用心には用心でもう少し稼いでから行きま

「ひつじ

勇者である梓の判断により、今しばらくレーべ周辺での「ひみつき」を続ける一行。

そして、回復アイテム等も充実しついで新大陸へと向かうこととなつたのであった。

第5話・ギリギリのパーティーバトル

魔法のたまを携えてやってきた一いつ田のダンジョン。

いざないの洞窟。

唯「何だか不気味だねえ」

純「洞窟のダンジョンなんてそういうものだと思つますよ」

澪「…」

梓「澪先輩…もう少し強くなつてから入りますか?不安なら…」

澪を心配してそう言つ梓。

澪「ごめん梓。さつきあんな事言つておいて立ち止まつてなんていられないだろ」

唯「大丈夫だよあずにゃん。この四人なら乗り切れるよ

梓（遊び人の唯先輩の行動が予測不可能すぎてそれが怖いんですけど…）

とりあえず先へ進むと、壁により道がふさがっている個所にやつてきた。

澪「これで魔法のたまを…」

魔法のたまをセットして…爆発と共に壁は崩壊し奥に通路が現れた。

唯「！」のたまつて他にないのかな？」

梓「？」

唯「モンスターに使えば効果抜群だよ」

純「唯先輩…確かにそつかもしれませんけど…ゲームバランスが崩壊しますよ」

いつもと変わらない様子で、こぎないの洞窟を歩んでいく四人。

梓「敵も手強いので気をつけてください…えっと、バブルスライムとアルミニラージと言うモンスターは注意が必要です」

唯「それってビリーヴの？」

梓「先生が持つてきたモンスター図鑑によると…こんなモンスターで…」

澪「…梓…」

モンスター図鑑を見た直後、澪の動きが止まった。

唯「澪ちゃん？」

澪「向こうにいるの…そのモンスターじゃ…」

奥の通路からやつて来ているモンスターの群れ。

それはバブルスライムとアルミニージ数体ずつの群れであった。

唯「これって…ヤバいかな」

純「攻撃力の高い私と梓が先頭で上手く食いとめれば…」

と、その時

澪「みんな、伏せて!」

いつもとは違う澪の放つ大きな声。

唯「澪ちゃん…」

そう言い切る前に、梓により無理やり伏せさせられた唯。

澪「これでも…ギラッ!」

かざした手から放たれた閃熱の呪文。

その呪文は襲いかかってきたバブルスライムをあつさりと撃退させた。

唯「凄い、澪ちゃん」

梓「純！唯先輩！」

二人の名前を呼ぶと同時に起き上がり駆け出していた梓。

それに続く純と唯。

そして…大きなダメージもなく無事にこの戦闘を乗り切る事が出来たのであった。

梓「他にも危険なモンスターもいます。すぐにここを抜けましょう」

足早にいざないの洞窟を進んでいく一行。

しかし、最初のダンジョンであったナジミの塔とは違い薄暗い洞窟の中では地面に穴があつて進めなかつたりとより迷うような構造になっていた。

梓「ホイミ…」

今回は僧侶の和が参戦していなかったため、梓がみんなの治療役を行っていた。

純「梓、精神力は大丈夫?」

梓「呪文の攻撃は澪先輩がやつてくれてるから、何とかMPは回復にまわせてるけど…」

まだ先にあるであろう出口。

確實にそこに向かって進んでいるのだが、徐々に減るHPとMPが段々焦りをもたらしていた。

澪「私もいつまで呪文を使い続けられるか…」

純「結構進んだから、戻るのも大変だよね…何とか抜けたいけど」

梓「進もう…」

その場で喋っていてもモンスターがやつてくるだけなので、急いで進む一行。

と、階段を進んだ先で今までと違う雰囲気の通路が見えてきた。

純「道が三つに分かれて…正面の道の先には扉が見える」

澪「三つ…正解は一つみたいな感じかな」

唯「いつものは直感だよー」

と、真ん中の道へ駆け出して行った唯。

梓「…いつも時は唯先輩の明るさが頼もしく思えます…」

澪「まあ、唯は考えて行動するタイプじゃないしな」

そつぬいひ澪。

しかしながら、一つの道を進んでどちらも行き止まりであつ少し疲労がたまつた一行。

そして、最後の一つ。

梓「あつと出口です。突つ切りまじょう」

疲れてはいるが、この先が出口であると信じて力を振り絞り先に進む。

澪「…？」

そして、その先にある渦巻いている泉を見つけた澪達。

純「これが集めた情報にあった旅の泉？」

唯「入って大丈夫だよね」

梓「後ろからモンスターも来ているみたいですし、行きましょう」と、勇者らしく一番手で飛びこんでいった梓。

すると、その場から梓の姿が消えた。

そして…。

その先で四人が見たのは、城と城下町の光景なのであった。

純「あれが…ロマリア…」

そこからの行動は速く、あっさりとロマリアの城下町へと到着したのであった。

純「まずは一休み…」

純にいわれるまでもなく、宿屋にて一晩休むことこした一行。

唯「ねえねえ、この街の地下にモンスター闘技場があったよ…何か面白そうだよ」

純「いつの間にそんなのを見つけてくるんですか…唯先輩」

梓「遊ぶのは後ですー口マリアを探索して…城なら王様に顔を見せこないと…私は勇者ですし」

そんな訳で、渋々な唯と共にロロロニアの街と城を探索していくた。

そして、探索後唯の強い希望でモンスター闘技場に足を運んだ梓達。

唯「向こうの予想屋さんだと次に当たるのは大がらすだつてー。」

純「えつ、でもこのメンバーだと…」

次の対戦はいつかくつわざVS大がらすVSバブルスライムであった。

梓「澪先輩、どうしまじょひ

澪「私が決めていいなら…バブルスライムかな」

唯「予想屋さんは…」

純「まことに思つから

純「まことに思つから

しかし、澪の考えは的中し僅かながら手持ちゴールドを増やすこと

に成功した。

「唯 やつたね澪ちゃん。じゃあ、もう一回…」

また賭けようとする唯を一喝して止めた梓。

そして、ロマリアの王様にあった後ルーラで仲間の待つアリアハンへと戻つていったのであった。

目的達成

梓 L V9 装備品・鎖鎌・皮の鎧・青銅の盾・皮の帽子・くじ
けぬ心

純 L V10 装備品・鎖鎌・皮の鎧・皮の盾・皮の帽子
唯 L V9 装備品・鎖鎌・亀の甲羅・皮の盾・ターバン
澪 L V8 装備品・棘の鞭・亀の甲羅・皮の帽子

報告

本を読んで澪の性格が【きれもの】に変わりました。

本を読んで唯の性格が【ぬけめがない】に変わりました。

くじけぬ心を装備して梓の性格が【くじけん】に変わりました。

第6話・カンダタ退治のその前に

憂「みなさん、お疲れ様です」

と、出迎えてくれた憂。

唯「うめんね憂。退屈な思いさせちゃつて」

梓「うん、本当に申し訳なく思つてます」

純「何とかしてあげたいんだけどね…作者の力でもどうしようもな
いし」

さわ子「新大陸に進出した所で、また新たな情報を得たみたいね」

澪「金の冠が盗まれたとか…」

梓「次はその盗賊退治ですか?」

さわ子「その前に、この周辺のモンスターになれておいた方がいい
でしょ。澪ちゃんがいなかつたらいざないの洞窟だつて危なかつた
んだし」

梓「なんで私達の旅の様子をよく知つているのかは謎ですが…確かに
にそうですね」

和「話をまとめて考へると、その塔に行く前にあるこのカザーブつ
て所が次の目的地になるわけね」

道中で手に入れたマップを見ながら歩き出す和。

さわ子「じゃあ、カザーブに向かうメンバーを選出するわよ」

梓「…憂…」

心配そうな顔でそう呟く梓。

【目的地・カザーブ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者	Lv9
唯：遊び人	Lv9
律：武闘家	Lv6
澪：魔法使い	Lv8

梓「やつと純が外れたと思つたら…」

唯「何で私の方見てるの、あずにゃん」

紬「…憂ちゃんがいなくなつちやつたわね…」

律「さわちゃん! 何とかならないのか」

さわ子「いつもルールになつてゐる以上はね…でも、その代わり
しっかり武具を集めてくればレベル1でもそこそこ強くなれるわけ
だし」

唯「憂がいつでも冒険に出れるように頑張ろ!」

梓「憂…」

澪「律が入るのは久しぶりだし、新大陸からのスタートは危ないな」

律「今の装備が稽古着だけだしな……」

そんな訳で一行はレーべ周辺にて、再びレベル上げとゴールド稼ぎを行い始めた。

しばらくして…。

律「それにしても勇者ってレベルアップ遅いんだな」

梓「律先輩にも追いつかれそうですね……でも、一応万能に動けるので良しは良しなんですけど……」

澪「武具も買うものなくてゴールドもたまる一方だし、そろそろ力ザーブに向かおうか?」

そう提案した澪。

唯「力ザーブに行けば新しい武具が見つかるかもしないしね」

梓「唯先輩の意見もたまには一理ありますね」

唯「何気にひどいよ、あずにゃん」

律「じゃあ、梓…掛け声頼むぞ」

いきなり話を振られて驚いた表情を見せる梓。

梓「掛け声つて…初めて知りましたよ

律「いや、単に話を振つてみただけだ」

澪「でも、私達はチームだし…勢いをつける為にせやるのもいいかもな」

唯「いつになく澪ちゃんが積極的だね」

梓「…わかりました…では、勇者一行…次の目的に向けて…」

梓・唯・律・澪「しゅつぱ～つ…！」

まだまだ楽に倒せるとはいえないものの、モンスター達を協力して倒して進む一行。

澪「新呪文…イオ！」

魔法使いとして敵を一掃できる力を持つ澪が、後方から支援しつつ前衛でその力を振るう梓達。

そして、あたりは暗くなり…。

律「あっちに見えるの…」

唯「力ザーブだね！」

喜んで駆け出そうとする唯。

しかし、その進路を塞ぐかのように次なるモンスターが出現した。

澪「こつもつ…」

梓「いえ、あればこつもつ男です。動きが素早いので気をつけ…」
梓がそんな説明をしている間に、行動を開始し始めたこつもつ男の群れ。

澪「私が何とか…って…」

呪文を唱えようとする澪に迫る一匹のこつもつ男。

律「やせるかっ！」

と、横から律が拳でこつもつ男を弾き飛ばした。

律「広範囲系はいいから、単体系の呪文で確実に仕留めてくれ

澪「ありがとうございます。うん、やるよ」

と、冷気が澪の掌に集まる。

澪「ヒヤー！」

澪の放った氷系の呪文は、こつもつ男を一匹氷漬けにさせた。

梓「ありがとうございます、澪先輩」

そして、追撃の剣を放ち撃破する梓。

律「またモンスターに寄つてこられたらまずい。倒して進路を確保しながらカザーブに入るぞ」

唯「了解！」

「つまり男達を撃破しながら、カザーブへと向かう一行。

回復の主な手は梓だけであったが、強くなつた一行はよう多くの戦闘をこなせるようになつていた。

澪「最後の一休、ヒヤド！」

澪が残り一体となつた「つまり男を撃破し、その勢いのままカザーブへと到達したのであった。

律「レベル上げの時もそつだつたけど、昼夜が違うと敵も違つてきて大変だな」

梓「昼間の敵も厄介なのが多くて大変ですね…とりあえず宿で休みましょう。澪先輩の精神力もギリギリでしょうし」

そんな訳で新たな地でゆっくりと休む梓達。

翌朝。

お決まりの新天地の探索。

澪「唯の予測通りに武具の店もあつたな」

律「梓のルーラにここも登録されだし、カザーブも見て回つたし…

あそこに行つてみよつぜ

律の言つた「あそこ」とは、道中にあつたすゞらしく場の事であった。

唯「確かにルールは一人でやるんだよね…私達だと代表のあずにちゃん？」

梓「一人で進むのは心細いですが、先輩達が見守つていいのなら…」
そんな訳で、一行はアリアハンに帰る前にすゞらしく場へと足を運んだ。

律「カザーブに入る前にちょっと見てきたけど、面白そうだったからな」「

澪「ロマリアのモンスター闘技場もそつだけど、あまりのめり込むと痛い目を見るだ

仲間達にさう忠告する澪。

唯「大丈夫だよ、あずにちゃんとやつてくれれる

唯達の期待を胸にすゞらしく挑む梓。

しかしながら、一回田はゴール前まで来るもピッタシに到着しなければならずその途中で落とし穴に落ちてしまった。

「一回田は何とか粘るものなの、最後までゴールのマスは踏めずサイロの数がなくなり終了となつた。

そして、すゞりくを行つ為の券は残り一枚。

先程力ザーブを探索して見つけたものである。

唯「頑張つて、あずこちゃん」

梓「ラストチャンス、行きます」

最後のトライの一歩を踏み出した梓。

律「まあ、何だ…誰にでも失敗はあるって」

梓「…」

完全に落ち込みモードに入ってしまった梓。

梓「澪ちゃん、何とかして~」

澪「いくら私でも…」

最後のチャンスにかけた梓。

しかし、一発目…止まった森のマスを調べ落とし穴に落ちてしまい
…。

澪「梓、ムギ達が待つてる…アリアハンへ戻ろ!」

梓「そうですね…魔王を倒す辛さに比べたら…すゞりく場で一度
もゴール出来なかつた私の惨めさなんて…」

律「そりとつあひやつてゐな……これ」

そう思いつつ、梓のルーラでアリアハンへと戻り目的の達成を伝え
るのであつた。

目的達成

梓 L V 1 1 装備品・鉄の槍・鉄の鎧・青銅の盾・木の帽子・
くじけぬ心

律 L V 1 0 装備品・鉄の爪・武闘着・お鍋のフタ

唯 L V 1 2 装備品・鉄の槍・亀の甲羅・皮の盾・ターバン

澪 L V 1 1 装備品・ブーメラン・亀の甲羅・お鍋のフタ・毛

皮のフード・ついたものじっぽ

第6話・カンダタ退治のその前に（後書き）

ずいぶんく場は本当に「ゴールできなかつた」…これってキャラクターの運のよさも関係しているのだろうか…だとすると一番運のよさの低い梓では「ゴール出来ないのか…

第7話・ついにボス戦…VSカンダタ

さわ子「このルールの辛い所は、レベル上げが大変って事ね」

純「先生、いきなりそんな事言われても…」

梓「私は常にメンバーですからいですけど、先輩達や憂・純はドキドキなんですよ」

梓がそう言つのも無理はなかつた。

次に選ばれると言つ事は、初めてのボス戦でありカンダタと戦うことになるかもしないのである。

澪「話し合いで解決とか出来ないのかな」

律「決まっているレールの上を進むこのゲームの世界でそれは期待しない方がいいぞ」

唯「りつちゃんは夢をぶち壊す人だよねきっと」

律「どういう意味だーっ

いつものやり取りをいつものように沈めるさわ子。

そして、ドキドキのランダムメンバー選出が開始された。

【目的地・シャンパーーの塔、カンダタ退治】
出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 Lv11

純：盗賊 Lv10

唯：遊び人 Lv12

和：僧侶 Lv7

梓「回復が出来る和先輩がいてくれて、とりあえずは安心なんですけど…」

純「選ばれたのだから仕方ないわ。力を合わせて乗り切りましょう」

和「遊んでるのだから仕方ないわ。力を合わせて乗り切りましょう」

純「私と和先輩は武具が最高のものじゃないのでレベル上げついでにまたゴールド貯めて武具を買わないといけませんね」

和「そんな訳で、またここからレベル・ゴールド上げのやり取りが始まつていくのである。」

ドラクエ内時間で…幾日か経つて…。

またしても遊び人・平沢唯の発言から大変な冒険になつていくのである。

梓「結構強くなつたし、行けるところまで行つてみよつよ」

梓「な、何を言い出すんですか唯先輩」

唯「だつて地図見たら歩いて別の町に行けそつだよー。」

和「まちなさい唯。別の町に行くまで更に強いモンスターが出るの

すでに行く態勢に入つてゐる唯。

よ。途中で力乏きたら……」

唯「でもでも、町にいけばいつでもルーラで行けるし……もつと強い武具もある。そうでしょうあずにゃん」

梓「それは……そうですけど……」

純「更に先にいるモンスターに勝てるようになれば私達の目的も楽にクリアできますよね」

梓「純！賛成派！？」

和「……」んなところでバラバラはまずいわ。私が回復でフォローするから行つてみましようか

梓「和先輩まで……わかりました……でも危険になつたらすぐルーラで帰りますからね」

怒りながらも内心はワクワクしている様子の梓。

まずは北にあるノアーナーを田指すことになった。

梓「すみません和先輩……」迷惑を……

和「構わないわよ。唯の事は私がよく知ってるし……やりたいことがやれて戦闘も上手くなっているわ」

唯を見ながらそう告げる和。

そして、ノアーナーに足を踏み入れた一行。

しかし、田の前の光景に驚きを隠せずにいた。

唯「寝ちゃってるね。みんなでお昼寝の時間かな

純「流石にそれはないと・・・」

探索しつつ人々の様子を見ていくと、何処にいる人もみんな眠ってしまっていた。

唯「どうしようか

とりあえず悩んでみる唯。

和「何か原因があると思うけど…もう少し調べてみましょう」

そして、ノアーノールの方で唯一起きている人を発見した一行。

唯「エルフが関係してるんだね…エルフってモンスターかな

梓「和先輩…」

和「私達の目的は盗賊退治。今はまだ深く関わらない方がいいわね
…それに唯がもう次の事考てるし」

唯「和ちゃんがそう言つなら次の探索地へ向かおう

なぜか張り切っている唯。

梓「…って…」

一度ロマリアに戻り、唯が向かおうとした先を見て唖然となる梓。

純「橋を渡るんですね…」

唯「この先に街がある限り、私達は進んでいくのだよ」

和「こうなつたら行く所まで行くしかなさそうね」

梓「和先輩まで唯先輩の勢いが…」

梓の心配をよそに、一行の快進撃は続いていった。

アツサラーム、そして砂漠のイシスまで到達してしまったのだ。

梓「一気にルーラで行ける所が増えましたね…道中は色々大変でしたが…」

少々溜め息混じりな梓。

純「危険もありましたけど武具も私達も強くなりましたし…」

唯「じゃああずにやん!」

梓「はい! それじゃ本来の目的…塔にいる盗賊・カンダタを倒しに行きましょう!」

意気込みも新たにようやくシャンパニーの塔へと突入していった一行。

梓「やはり明ること進むのが楽ですね」

純「でもやつぱつのばつてこくのは辛いんだけど・・・」

唯「和ちゃん、ダメージ受けたから回復を・・・」

和にホイニをかけても「うづうづ頼む」唯。

和「はい、薬草」

袋より取り出した薬草を渡す和。

梓「呪文には限りがあるんですから、薬草で我慢してください」

そんなこんなで、敵を撃退しつつ宝も取りながら上を手探し進んでいく一行。

子分「誰がやつて來たぞ」

純「あれつて・・・」

和「カンダタの仲間ね」

と、いきなり駆け出して上の階に行ってしまった子分達。

梓「追いましょう」

子分を追いかけ、辿り着いた最上階。

カンダタ「誰だか知らないがよくここまでこれたな・・・だが・・・

「

と、笑みを浮かべるカンダタ。

和「……みんな下がつ……」

カンダタ「遅い！」

その瞬間、梓達の足元の床がなくなり落ちていく四人。

唯「いたた……」

純「でもダメージにならない所がこの世界ですね」

梓「罠にかけるなんて……絶対捕まえてやるです」

梓達は急いで最上階へと舞い戻る。

しかし、すでにカンダタと子分達の姿はなくなっていた。

純「階段はここだけのはずなのに」

不思議に思つている純。

和「あつちに壁がない場所があるわ、おそらく……」

唯「よーしーやっつけに行くぞ!」

怖いものなしの唯は、そこから下に飛び降りていった。

それに続く梓達。

カンダタ「しつこい奴等だ・・・と、よく見たら全員女か・・・」

梓「なんか嫌な視線ですけど・・・」で倒すです！」

そして、戦闘モードに移行する両パーティー。

和「この辺りも壁がないわ。落ちないよつて気をつけて」

純「じつ時は先手必勝！」

動きの素早い純が最初に仕掛けていった。

梓「唯先輩！」

唯「オッケー、あずにゃん

カンダタ「なんなんだ…普通の奴らの動きじゃ…」

次々と子分は倒れていき、残すはカンダタのみとなつた。

アツサラーム周辺でレベル上げが出来るようになつたパーティーとはいえ、カンダタはそのモンスター達よりも強かつた。

梓「純、ダメージは？」

純「あのコソグ達の方が攻撃は可愛いわ…一撃の重みはあれが上だし…」

和「ルカ」で防御は下げるから…大きなダメージを貰つ前に集中攻撃で

カンダタを囮のように展開する梓達。

カンダタ「ぬつ…」

そして…。

和のホーリーランスの一撃を受けたカンダタは、その場に崩れるよう倒れたのであった。

唯「やつたよーあずにゃん!」

大喜びして梓に抱きつく唯。

梓「この世界でもやる事は一緒ですか…って、まだ終わってません」

カンダタの前に立つ梓。

カンダタ「負けるのはともかく…女に打ち負かされるとはな…」

と、目の前に金の冠を置いたカンダタ。

カンダタ「いっは返すぜ…また縁があれば何処かで会うかもな…」

と、いきなり起き上がったカンダタは子分と共に塔の外に飛び出していった。

純「逃がしてよかつたの?」

梓「一応私達はこの冠を取り戻しに来たわけですから…とつあえずロマリアに戻りましょう」

そんな訳で、金の冠を手にロマリアの王様の元に戻ってきた梓。

しかし、その後大変な出来事が起きてしまった。

うつかり返事をしてしまった梓は、ロマリアの王女となってしまったのだ。

今までと違う状況でなおかつ一人ぼっちになり、どうしようかと悩んでいた梓。

城や街を歩いて人々の役に立つ事をやりながら、モンスター闘技場で再会した元・王様と話をじてみやげく元の勇者・梓に戻る事が出来たのだった。

唯「おかえり～あずこちゃん」

宿屋で待機していた唯達は、戻ってきた梓を出迎えた。

純「でも、羨ましい…あんな格好出来るんだし」

和「澪達も見たかったんじゃないから」

梓「あんまり見せたくないです…じゃあアリアハンに戻りましょう」

…

唯「じゃあ澪ちゃん達が仲間になつた時にここにきてまた王女にな

ればいいんだよ

梓「王女の話はもう終わりです！」

そう言いながらルーラを唱えて、仲間達と共にアリアハンへ戻つて
いった。

初めてのボス戦も難なくクリアした梓達。

そして、次なる冒険は…。

目的達成

梓 L▼14 装備品・鋼の剣・鉄の鎧・鉄の盾・毛皮のフード・
うさぎのしっぽ

純 L▼15 装備品・チョーンクロス・絹のロープ・うさぎの
盾・毛皮のフード

唯 L▼15 装備品・鉄の斧・皮の腰巻・うさぎの盾・毛皮の
フード・ぐじけぬ心

和 L▼13 装備品・ホーリーランス・鎖帷子・うさぎの盾・
毛皮のフード・ガーターベルト

第8話・ヒルフと眠り人達

いつもとは違う口調。

それでもいつもと同じように朝はやつてくる。

紺「学校に通っていた頃からは考えられないわね」

唯「モンスターと戦つたりしないもんね」

さわ子「貴方達、今回のクエスト・・・ひゃんと確認した?」

梓「唯先輩の提案で、先に立ち寄ったノアールの問題解決ですね」

純「みんな眠つたままになつているんでしたっけ」

澪「私達まで眠らされるとかないよな・・・」

そんなことを考える澪。

さわ子「その心配はないとと思うわよ。私達は何も悪いことしていないんだし、堂々とやつてきなさい」

澪「言ひ放つさわ子。

憂「で、メンバー選出したんだけビ・・・」

【目的地・ノアールの件の解決】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 LV14

唯：遊び人 LV15

澪：魔法使い LV11

紬：戦士 LV5

紬「憂ちゃん・・・」

そして、そんな様子を眺めていた律は何か考え事をしているようだつた。

唯「今度はりっちゃんがはじかれたね」

律「ん？・・・ああ・・・ランダムだし仕方ないだろ。それよりムギが久しぶりに加入するんだからしつかりやれよ梓」

梓「言われるまでもありません！」

そして、恒例事項も済ませ一行はノアーナーに再度やつて来ていた。

紬「本当にみんな眠つてるわ」

梓「唯一起きていた人の話から・・・」の先にある集落にエルフがいてそれが原因と

唯「じゃあ早速・・・」

次に行く場所が決まつたらゆつたりしていられない唯は、すぐにノアーナーを飛び出した。

そして、木々が立ち並ぶその中にその集落の入り口を見つけた梓達。

澪「モンスター……じゃないんだよな……」

唯「奥に進んでるんだけど、何か私達避けられてない?」

紬「人間が怖いとか

梓「そう言つたことも含めて、あの奥にいるエルフに話を聞けばわかると思います」

そう言つて前を見ると、他のエルフ達とは明らかに違うエルフがいたのだった。

『何故人間がここに立ち入ったのですか?』

梓「ノアールの人達について教えてほしいんです」

『……』

そして、梓達は彼女から全ての事情を聞いた。

紬「少し気持ちはわかるけど……でも街の人をみんな眠らせるのは……」

澪「ここからすぐ南にある洞窟に行くんだる……そこにその夢見るルビーがあるんだる」

梓「とにかく行ってみるです」

ノアールの人達を助ける為に、洞窟へと突入する梓達。

紬「私と梓ちやんで道を切り開くわ」

唯「わすがムギちゃん、パワーファイターだね」

梓（…ムギ先輩に斧装備つて…最強なんじゃ…）

ふと、そう思つてしまつた梓。

やはり、最初のこのダンジョンとは違い階層数が多くより体力・精神力の消費が激しかった。

唯「澪ちゃん、大丈夫？」

澪「梓やムギが何とか敵を倒してくれてるから、私の負担も減つて…」

唯「でも、この洞窟に流れる水つて綺麗だね」

梓「そう言えればさつき見つけた泉の水で回復しましたしね」

そう言つ梓。

そして、次の階層に降り立つた梓達は雰囲気の違いに気付いていた。

澪「何かいるのか？」

ちゅつと怯えながらそう言つ澪。

梓「違います…あそこ…水辺の所に宝箱が…」

唯「よ～し、私があけてみるよ」

怖いもの知らずの唯が勢いよく宝箱を開けた。

紺「宝石…つて、これが夢見るルビー？」

澪「唯、一緒に何か紙が入ってるぞ」

澪に言われて一緒に入っていた紙を取り出した唯。

唯「あ、あずにちゃん…」

梓「どうしたんですか…この紙に何が書かれて…」

唯から受け取った紙を見てみる梓。

梓「…エルフの所に戻りましょう…今すぐ」

澪「ああ、リレミト使つぞ」

澪のリレミトをぐさき洞窟から脱出する梓達。

『これは…夢見るルビー…それにこの手紙は…』

梓「私達はただの冒険者ですからエルフ達の事について深くかかわる事はしません」

『…私は少し厳し過ぎたのかもしませんね…それと

梓「？」

『貴方達はこの世界のものではありませんね…何か違う雰囲気を感じます…と、貴方達の事情を知ったとしても私には関係ないのでしたね…』

そう言うと梓は彼女から目覚めの粉を受け取った。

澪「あ、ありがとうございます」

そして、足早にエルフの集落を後にしてノアーナーで戻った梓は目覚めの粉を使用。

すると、粉は風に乗り街中に広がつていった。

紺「街の人達が動き出した…」

唯「ようやく起きたんだね」

澪「じゃあここから情報収集だな」

改めてノアーナーで探索を開始する梓達。

梓「オルテガ…って、確か私…じゃなくて私と入れ替わった本来の勇者のお父さんなんだよね…でも、それって結構前の話だから…そんな前から街の人達は眠らされて…」

梓自身はオルテガの事など知るわけはないのだが、勇者と入れ替わっているからなのか奥底にオルテガに関する記憶がある気がしていた梓。

唯「でも、これで一件落着だね…ムギちゃんも強くなつたしね

紬（そうだけど…憂ひやんの事何とかしてあげないといけないし…）

そつ考える紬。

梓「それじゃっ、ルーラですっ」

勢いよくアリアハンに帰つてきた梓達。

唯「あれ…ルイーダさんの酒場の雰囲気がなんか変な…」

純「あつ、澪…先輩…」

澪「一体…何が…」

澪がそう尋ねた時、椅子に座っていた律が突然立ち上がつたのであつた。

目的達成

梓 L V 15 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎ
のしっぽ

紬 L V 13 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜

唯 L V 17 装備品・鉄の斧・皮の腰巻・うさぎの盾・毛皮の
フード・ぐじけぬ心

澪 L V 14 装備品・ブーメラン・マジカルスカート・お鍋の
フタ・毛皮のフード・銀のロザリオ

第9話・緊急企画一（前書き）

「やつはしおりやなかつたのでやる事にしました

第9話・緊急企画！

唯「どうしたの…？」
「…」

驚きの表情を見せる唯。

憂「あの、律さん…別に私の事ない」

律「けいおん部の部長権限で緊急企画を発動せざる…」

いきなりそう言い放つた律。

唯「や…わわわわ…」

さわ子「私は何もアドバイスとかしてないわよ…」

和「律が自分でそう決めたのよ」

そつ説明する和。

澪「おい律！また勝手に…」

律「澪は憂ちゃんをこのままにしていいと思つてこらのが…」

唯「えつ、憂？」

律にそう言われて、憂の方を見る唯。

憂「えつと…」

紺「それでりつちゃん、緊急企画つて…」

律「ルール上ランダムで選ばれたメンバーが次の目的をこなしていく…そだろ?」

澪「そだよ、だから…」

律「でも、このままだと憂ちゃんが可哀想だろ。だから次は先に進まずに緊急企画としてレベル上げを目的として梓に人選してもらつてやううと」

梓「私が選ぶんですか?」

そつ質問する梓だが、自分が勇者だと思い勝手に了承した。

そして、みんなの視線が梓に集まつていた。

梓「えつと…律先輩の好意を受け取つてまず憂を…」

憂「何だかみんなに迷惑かけるみたいで…」

唯「残り一人は…」

期待する眼差しで梓を見る唯。

梓「レベル上げが目的ならレベルの低い律先輩…」

律「あたしなら別に選ばなくとも…」

梓「律先輩が私に人選を任せたんですよ。逃がしはしないです」

純「逃がしはしないって……梓……」

唯「じゃあ、最後の一人は……」

また全員の視線が梓に集まる。

梓（レベルを考えれば低めのムギ先輩か和先輩……能力的な事も考えると……）

そして、梓が選んだ最後の一人は……。

【目的地・特になし（しいて言えば商人・憂のレベル上げ）】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 LV15

和：僧侶 LV13

律：武闘家 LV10

憂：商人 LV1

唯「……私がいない……」

憂「お姉ちゃん……」

純「私も結構パーティーに加わってレベル上がってるからな……」

和「私でよかつたの？」

梓「はい、ムギ先輩には申し訳ないと思つたのですが……」

紺「梓ちゃんにしないで。梓ちゃんが勇者なんだからやつたいよ
うにでいいんだから」「ひ

微笑みながらそう言ひ紺。

そんなわけで、ロマリアよりスタートすることにした一行。

律「ロマリアで憂ちゃんは大丈夫なのか?」「…

そう聞く律。

梓「多少装備で強化されていますけど、最初のうちは防御してもら
うしか…私と和先輩の呪文で出来る限り早く戦闘を終わらせま
すから」

律「レベルは低くてもあたしだっているんだからなー」

張り合ひよひそひ叫ぶ律。

憂「初めての冒険…」

律「何でも出来る憂ちゃんも、冒険は緊張するよな~」

憂「梓ちゃんもそひだつたの?」

梓「私は…はじめは一人だったから寂しいのがあつたかな…」

「

律「そうだよな~それであたし達が巻き込まれたんだしな」

梓「むつ・・・律先輩、何氣にまだ根に持つてますね」

憂「今までこんな感じだつたんですね」

和「部室にいても冒険に出てても、唯達は変わらないわよ」

そう告げる和。

それからレベル上げを続けていく一行。

律「しかし何だな・・・いつのまにか憂ちゃんが相当強くなつてゐるよう
な・・・」

そう呟く律。

梓「何気に装備できる物も多いから・・・律先輩の防御力をあつさり上
回りましたし」

憂「えへへ・・・」

和「でも、これで一段落かしら・・・次の目的地・・・油断できない場所だ
から」

梓「中には入つてないんですけど・・・外からは見ました・・・ペリカニッシュドで
すね」

律「カンダタ戦に次いで一いつ田の難関か?」

和「目的としては一いつ田の鍵を手に入れること...こつものように連
携していけば大丈夫なはずよ」

梓「和先輩がいてくれると一番安心できるんですけどね」

律「私も先輩なの何だうか…」の扱いの差は、

憂「私は頼りにしますよ」

律「憂ちゃんは、ええ子や～」

梓「そろそろ良いレベルですね。早く戻らないと誰先輩が泣いてるかもしません」

憂・和「……」

そして、一行はアリアハングへと直行…したのだが…。

唯「憂～！」

帰つてくるなり憂に抱きついてきた唯。

紺「あらあら…」

澪「姉の威厳はやっぱり無しだな」

やつぱりとこの表情をしている梓・和・律。

憂「“めんねお姉ちゃん、心配かけちゃって”

唯「ううん、大丈夫。これで憂だつて強くなつたんだもん…いつでも一緒に行けるよ」

憂「うん。」

笑顔でそう返事する憂。

さわ子「憂ちゃんが旅に出るたびにやつしてたら、身が持たないわよ… やてと…」

と、真剣な表情になるさわ子。

紺「次のダンジョン…」

澪「ああ…」

さわ子「ペリラッシュは仕掛けも多くてみんなには大変なクエストになるとと思ひけど…」

梓「やつてやるですー！憂や純、先輩達がいますから必ず乗り越えられます！」

さわ子「その意気よ、梓ちゃん」

唯「えうだねあずにゃん。私も張り切っていぐよ」

和「それじゃ早めに休みましょー。また明日から大変なんだから」

明日以降に挑戦するペリラッシュ攻略。

もちろんみんな事を言つた梓自身も、全く不安がないわけではなかつた。

それでも今はゆっくりできる時間を大事にして、その身体を休めるメンバーたちなのであった。

目的達成

梓 L V 1 6 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うさぎのしっぽ

憂 L V 1 3 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・毛皮のフード・うさぎのしっぽ

和 L V 1 5 装備品・ホーリーランス・みかわしの服・「ひる」の盾・鉄兜・ガーターベルト

律 L V 1 3 装備品・鉄の爪・みかわしの服・おなべのフタ

第9話・緊急企画！（後書き）

これで全員が平均レベル14ぐらいになりました
ピラミッド攻略にはまだレベル上げないといけませんが
出来る限り実際に攻略して、書きあげていきたいと思います
ではでは～

第10話・聖邪交わるアリババ

梓「…つこでここまで追いかきましたね

ルイーダの酒場で休んでいた梓がいきなりそんな事を言った。

唯「どうしたこと?」

澪「唯の提案で先走ってイスラまでやつてきたけど、よつやく本来の目的としてイスラにやつてこれた…って事だよな梓」

梓「澪先輩のおっしゃる通りです」

紬「街と城の探索は終わってるから…」

さわ子「何度も言わせないでよね。次のダンジョンは大変よ

唯「大丈夫だよさわちやん。私とあずこちゃんがいれば…」

梓「遊び人の唯先輩がいると色々苦労するの…」

律「この世界に来て梓の唯に対する態度がきつくなつてないか?」

そして、こつものじとく開始されるワンドダム選考。

【目的地・ピラミッド攻略】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓：勇者 Lv16

純：盗賊 Lv15

紺：戦士 L V 1 3

澪：魔法使い L V 1 4

唯「私が…」

梓「和先輩がいないのが少し辛い気もしますが…攻撃能力的には問題ありませんね」

澪「あの縁のカニは呪文の方がいいしな」

純「何か私だけ戦力的に置いてかれているような…」

梓「ダンジョンで長期戦になるかもしませんから、しっかりと準備していきましょう」

純「私の心配はスルー！？」

そんなこんなで出発していく梓一行。

澪「レベルアップして新しい呪文を覚えた」

純「私のスキルって役に立つの？」

紺「えつと説明によると…忍び足は使えるんじゃないかしら？敵と会いにくくなる」

そう告げる紺。

梓「大丈夫だよ純。純だって役に立ってるから」

純「梓…」

四人の力を合わせ、強くなつピラミッドへと突入を開始した。

澪「いきなりの展開だな」

梓「毎回同じ出だしコントみたいな感じですからね…」

ちよつと溜め息を出しながらいつづり梓。

紺「仕掛けもあるみたいだから気合を入れて…」

純「ちゃんと忍び足でね」

そして、前半は忍び足の効果もあつたのか全く敵も出ず落とし穴も回避して問題の階層へやつってきた。

紺「ここで梓ちゃんの特技の出番よ」

梓「えつと…この思い出す…ですよね」

梓は頭の中に刻んだ話を思い出としてみた。

そして仲間達の協力の元、四つのスイッチを順番に押して見事仕掛けを解くことに成功したのだった。

梓「みなさん、ありがとうございます」

紺「ああ、奥へ進んでみましょ」

先程まで閉ざされていた部屋の先へと向かう一行。

純「よ～し、盗賊として一番乗りで…」

純が宝箱を開くとそこにはこの世界で一つの鍵となる魔法の鍵が入っていたのだった。

梓「えつと、目標的にこれでオッケーなのかな?」

澪「一応まだ上に向かう階段はあつたけど…梓の判断で決めよつ」

梓「澪先輩…分かりました…まだ何があるかも知れませんし、体力も精神力も余裕ありますから行つてみましょつ」

そう決め、四人はさうじて上の階層へと進んでいった。

梓「うつ…辺りに棺が…」

澪「…」

梓の言葉に固まる澪。

紺「澪ちゃん、ここで固まつては危険よ」

純「つて、確かに棺は怖いかもしだせんけど…あれですよあれー!」

と、純が示した先にはずらりと並んだ宝箱であった。

梓「明らかに罠っぽいんだけど…」

澪「…梓…任せる」

とりあえずそれだけ伝えた澪。

梓「それじゃ…つて、純!…?」

と、すでに純が一番近くの宝箱に手をかけていた。

そして、宝箱が開かれる。

すると、不気味な声と共にモンスター・ミイラ男が出現したのだった。

純「梓ちゃん!…」

すぐさま戦線に参加し、武器を振るう純。

紺の言葉に押される形で、参戦する梓。

純「盗賊の血の影響か…[宝箱を開けずには…]

梓「つて…」

そして、純が宝箱を開ける度にミイラ男が出現し辺りは混乱した戦場となり始めていた。

紺「この数…私達だけじゃ対処しきれない…」

梓「私も攻撃呪文あるけど…回復用に残しておきたいし…あとは…」

純「澪…先輩…」

と、Hコアの隅にじっと立っていた澪。

そして、そんな澪にもミイラ男は襲いかかってきた。

梓「澪先輩…！」

澪「そうだ…全て…全てを…」

と、澪の掌に熱いエネルギーが集約されていく。

紺「梓ちゃん、純ちゃん、伏せて…」

そして、三人が伏せると同時に

澪「ベギラマ…」

ギラヨリもさりに強力な閃熱呪文が、ミイラ男を撃破していく。

純「凄い…」

凄すぎて言葉に出来ない純

紺「その調子よ澪ちゃん…」

そして、澪の後方からの援護を受けて前線で戦う二人の若者達。

純「すみませんでした…」

大量のミイラ男達との戦いの後、反省させられている純。

純「でも、罠はなかつたし色々手に入つたから良かったわ」

梓「澪先輩、精神力の方は大丈夫ですか？」

澪「何とか…でも、もう怖くないし…先を急げ」

そして、さりに上を手指す一行。

純「頂上だね…」

純「宝箱もなさそうだし…これで探索はおしまいかしら」

と、そんな時梓は奥の方に光る何かを見つけた。

梓「これ…アリアハンの街の井戸の中にはいる人が集めてる小さなメダル」

澪「本当に色んな所に落ちてるんだな…」

純「結構順調にピラミッドクリアできたわね」

純「例によつてお約束の帰還方法が用意されてるみたいだよ、梓」

梓「じゃあ…」

勢いよく外へ飛び出す四人。

澪「相変わらず、よく無事に飛び降りれるよな…」

外からピリピリッドを眺めながらそつまつ澪。

紬「で、鍵を手に入れたわけなんだけど……これからどうするの？」

純「それってこの鍵を使っての探索を、私達か次の人に達かって事？」
梓「次の人達に迷惑はかけられませんから、私達で探索しちゃいましょう！」

そう決めた梓達は、イシスで一休みした後手始めにイシスの探索をスタートした。

そして……。

紬「お城にお宝があるって話は聞いてたけど……」

純「これが噂のほしかる腕輪！」

澪「装備すると素早さが一倍か……」

とりあえず全員の能力値を確かめてみる梓。

梓「純が装備したら数値が驚異的だね」

紬「でも、私と澪ちゃんは元の数値が低いから装備してもあまり……」

・

純「じゃあ、梓で決まりだね」

梓「いいの？」

純にそう聞いた梓。

純「一人の数値を伸ばしすぎるより、みんなを強化していった方がいいじゃん」

そんなわけでおしふる腕輪は梓が装備することになった。

それから各地にルーラで飛び、魔法の鍵で行けるところを探索する一行。

そして、最後にアリアハンを探索しルイーダの酒場に戻つていったのだった。

目的達成

梓 L▼19 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・おしふる腕輪

純 L▼18 装備品・チーンクロス・黒装束・うひこの盾・毛皮のフード・うつけつの腕輪

紺 L▼17 装備品・鉄の斧・鉄の鎧・鉄の盾・鉄兜・うきぎのしつぽ

澪 L▼17 装備品・ルーンスタッフ・マジカルスカート・おなべのフタ・毛皮のフード・銀のロザリオ

第1-1話・梓の運だめし（前書き）

久しぶりの更新となつてしましました。
出来る限り早く更新したいと思いますが…見守つていてください

第1-1話・梓の運だめし

梓「まづ、とりあえずは…」

何故かルイーダの酒場にてティータイムに入っていた梓達。

さわ子「ピラミッド攻略したわけだしね、今回は特別よ」

そう言いながらさわ子もお菓子を頂いていた。

澪「楽しむのもいいけど次は未知のエリアなんだぞ」

紺「そうね、事前に探索してきたイシスとは違うわけだし…モンスターも強力になっているはず」

純「でも、唯先輩は相変わらず【今】を楽しんでますけど…」

唯「やっぱティータイムはいいよね~」

しかし、そんな楽しい一時も長く続けられるわけでもなく…。

さわ子「さて、気分を切り替えてメンバー選ぶわよ」

梓（といいつつまだ手にお菓子とティーカップ持つてる先生に誰もツッコミを入れないとは…）

【目的地・ポルトガ】

出発メンバー（レベルは出発時のもの）

梓・勇者 Lv19

律・武闘家 L v 13

紺・戦士 L v 17

澪・魔法使い L v 17

憂「前回のから純ひやんと律さんが入れ替わっただけだね」

梓「それじゃこつものように準備して…」

さわ子「ちよつと待つじ」

と、いきなり梓達を引きとめるさわ子。

紺「どうしたんですか？」

さわ子「実は…道具袋の中[す]るべ券が8枚あります」

梓「つて、袋を漁らないでください」

さわ子「ア[す]でビッグチャンスを勧者である梓ひやんに[さ]るわ」

そういう放ったさわ子。

律「何なんだよ、ビッグチャンスって」

さわ子「アッサーームの南西にある[す]るべ場。そこで梓ちゃんにチャレンジしてもいいの」

梓「す[す]るべ場であまり良い思い出がないんですけど…」

さわ子「この8枚の券がなくなる前にクリアしたら…次のダンジョン

ン攻略の時に一人だけ好きな人を選べる権利を『えるわ

和「二つ目のすいりく場…」

梓「通りかかった時に下見はしてきましたけど…やはり難しいです
よ」

紬「でも、次のダンジョンで仲間を自分で一人選べるって報酬は大きこと思つ」

律「そうだな、和とかいてくれたら回復楽だしな」

各々そんな話をしている間、わわ子の提案に對して考えている梓。

梓「わかりました。寄り道することになりますけど…やってみます」

そんなこんなで、梓は二つ目のすいりく場のクリアとこう追加ミッションを受けことになったのだった。

澪「まあ、すいりく場の件もあるけど律のレベルも低いからつこで
に上げてこいつ」

律「お手数をおかけします」

レベルを上げた後、すいりく場へと乗り込んでいった梓一行。

律「よーし、部長のあたしが見守つていいからな

紬「頑張つてね梓ちゃん」

澪「負けるなよ、梓」

梓「ありがとうございます、先輩方へ行つてきます」

意気込みも良くなじむへ挑んでいた梓。

律「で、どうなるかな…」

澪「一番のポイントは中央にある旅の扉…あれに入らないと『ゴール』のあるあのストレートの道に行けない…」

紬「す」るくだから運が必要になるんだけど…」

「ごろくは一人でしか挑めないため、戦闘もかなりの負担となる。」

慌てながらも数回攻撃を与え、何とか腐った死体と擊破するものの体力は半分ほどに減らされていた。

梓（じゅ）は落ち着いて、長い道のりなんだから…）

梓はこの中で一番弱いミイラ男を一體残しておき、すばりへを始めた。袋から出しておいた薬草を一つほど使用した。

梓「フルに回復は出来なかつたけど、これで…」

律「よし、もうすぐ旅の扉の所だ……」

澪「梓…」

一つ田のすじいろく場では最終的にクリアはしたもの、田邊こもならないほどの出来であった。

だが…今日は誰も予想できない結果が待っていた。

梓「もうサイロロ一つで旅の扉に到達できる圏内…行きます！」

氣合を入れ放ったサイロロ…その出田は旅の扉にちょつと止まれる田であった。

律・紬・澪「…」

梓「やつた！」

旅の扉を通り中央の道へやつてきた梓。

梓「よーし！」

と、サイロロを振る梓…やあつたが

梓「ふざわちー？」

電流が梓を襲い一気にダメージを受けてしまった。

梓「この道…落とし穴はないけど…もしかして電流でダメージ受けすぎでリタイヤする流れー？」

律「そうみたいだな…道中じゅ回復できないからさつきの戦闘中に

やるか運よく止まつたマスで回復なんだりうなづ…」

紺「やつを完全回復してないから、今の体力で同じだけダメージを受けるとすると後一回受けたら倒れちゃうわ」

梓を心配する紺。

梓「でも、諦めません。報酬がどういつより、前回の活路を返上してやります…！」

空高く投げられたサイコロ。

そして、梓を含めて転がるサイコロの皿に集中するメンバー。

澪「あの出皿…」

律「まさか梓の奴…」

梓「くつ…ゴール…」

出た皿はゴールへ辿りつけられる皿。

意外な展開に当の梓も茫然となつていた。

梓「はつ…？…つて、茫然としている場合じゃありません」

急いでゴール内へ駆け込んでいった梓は置かれている宝箱を開いた。

梓「小さなメダルとモーニングスターか…とりあえずみんなと合流しましょう」

隅に作られている落とし穴から律達と合流した様。

澪「やつたな梓」

律「色々と楽しい展開を予想してたのに、まさか一発クリアなんて
な」

梓「どんな展開を想像してたんですかー?」

紬「すじぐく場もクリアしたわけだし、本来の目的に戻りましょう」

梓「はい!ポルトガへ向けて出発します」

すじぐく場一発クリアの勢いをそのままにして、梓達は目的地・ポルトガに向けて再出発していくのであった。

第1-1話・梓の運だめし（後書き）

上手くクリア出来たのに、何だかすみません的な気分です。
自分でも一発クリアするとは思わず…。
また次のすこしうるく場発見したら、このイベント再発させると思いま
す…多分
ではでは~

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7345w/>

ドラクエティータイム

2011年11月27日19時56分発行